

持ってる！

瑞浪高校演劇部 作

登場人物

A	彩香	小学生
B	美友	女子高生 2年
C	ピカール先生	ALT
D	佐藤	女子高生 3年
E	萌子	女子高生 3年
F	小西	女子高生 1年
G	永治先生	理科教師・顧問的存在

ME（例えば『ピンクパンサー』的な）。緞帳上手側にシーリングが点く。その中にそおとした足取りでDが出てくる。緞帳の中をしばらくうかがうようにしていたが、誰かが来た気配を感じて慌てて袖に去る。同時に日本的なおごそかなME。幕が開くと、物置のような雑然と物が積み上げてある空間。可能なら、壁を立てて学校の空き部屋の感じを出したい。さらに可能なら上手に出入りの戸を立てたい。部屋の真ん中の床に緋毛氈（ひもうせん 赤い敷物）を敷いて、Eがお茶を点てている。その対面にFが正座して待っている。Eのお点前（おてまえ）でFがお茶を飲む。二人とも着物を着ている。

F けっこうなお点前でした。
E お粗末様でした。

途端にFは足を投げ出して、大騒ぎする。残しておいた茶菓子をつがつ食う。

F あー、やっぱり正座とか無理無理無理！ あーでも栗きんとんうまい。郷土の誇り、川上屋！
E 小西！
F あ？
E 行儀が悪い！
F だってー。板の間に毛氈じゃ痛いし。
E だってじゃない。何、着物でその格好ってあり得ないし。
F 言わせてもらいますけどー、うち茶道部じゃないっすよね。
E もちろん。
F マゾ部でもないし。
E なんだ、マゾ部って。
F DMの集まり。茶道部のライバル。
E 茶道部ってDSの集まりじゃないし。そもそもここ部活じゃないから。
F じゃなんでお茶とか点（た）ててんですか？
E 精神統一にはお茶が一番なの。言っただしよ。

F わけわかんねっす。
E あんたのその集中力のなさが、能力をイマイチ生かすきれない原因だって、なんべん言ったらわかんのか？
F うち、萌子先輩とは違うんですー。
E もう！
F あー、毎日地味ですねー。早く事件とか解決したいなー。
E だから、それもなんべんも言うけど、事件とか関係ないから。
F でも、すごい力が出せるようになったら…
E そういう非現実的なこと考えてるからだめなんだって！
F はーい。

Bがそおっと入ってくる。

B 先輩…。

E 美友、どうした？

B 今、トイレに寄って来たんですけど…、あ、ちなみに…（快調でした。）

E 報告しなくていいから。

B で、いま、私、トイレで神様を…。

E トイレで神様？

F （歌う）トイレにはくそれはくそれはきれいなく

B ちよつと小西、邪魔しないで。

E こないだ中津川の公園でおばさんがそれ歌ってたな。

F で？ 今日は見えたんすか？

B かなりここ（手のひら）に感じたんだけど…。

F 残念でした。

E 今日はトイレの神様、昨日は図書館の幽霊、一昨日はなんだっけ？

B 女子更衣室の鬼。

F すっごくいかつい覗き魔みたい。

B どうして見えないんだろうな。

E …あのねえ、美友。小西もだけど、自分の能力について根本的な誤解してるよ、なんべんも言うけど。

F なんべんも聞きました。

E 美友も小西も、たしかに普通じゃない能力を持つてるけどさあ、なんか方向性が間違ってるんだって。

B だって…。

E うちの能力って、なんていうか生活っぽいもんだって。

F 生活っぽい？

E 二人がミステリー好きだったり、オカルトマニアだったりするのは勝手だけどさあ、あんたたちの能力って、その趣味には結び付かないもんだと思うよ。

B でも萌子先輩、せっかく能力持つてても、好きなことに使えなかったら意味なくないですか？

F そうすよ。先輩、やたらに能力使うなって言っつて、地味な訓練ばっかやらせて。

E 使う使うって言うけど、うちの能力って使えるってレベルじゃないじゃん。そもそも話はそこからじゃないの？ 美友も小西も乗り越えなきゃいけないことがあるでしょ。

F まあ、それ言われたら…。

白衣のG、入ってくる。

G ちょっといいか。

E あー博士。

G 永治先生と呼べ。

F 博士、今日早いね。

G 無視か。

B 仕事終わったの？ 博士。

G 三連続か。ちつとは敬意を示せよ。(着崩れているのを見て) だいたい小西、おまえ、なんだ、その格好。

F やまとなでしこ、狂い咲き。

G 着物ならちゃんと着ろ。萌子、後輩教育もちゃんとしてくれ。世話してやっってるこっちの身にもなれ。

E 世話してもらってるつもりないし。持ちつ持たれつでしょ。

B データ採らせてやってるし。

F あ、こないだの脈拍とか？

E 脳波もね。学会デビューの夢かなえるんでしょ、あたしたち実験台にして。

G 実験台って、人聞きの悪い。あんな、これ純粋な俺の学問的興味であって、学会とか…

B 所詮、科学では証明できないと思うけどね。

G はいはい。でもまあ、せいぜい協力よろしくね。あ、それでさあ。

E 何？

G まだ仕事終わってなくてさあ、戻んなきゃいけないんだけど、連絡だけしとこうと思ってな。

B 連絡？

G うん。今日、後ちょっとしたら、お客さんがあるから。

B お客さん？

F 誰？

G うん、なんか君らと話がしたいんだってさ。

E …ちょっと、博士！

B うちのことしゃべった？

G いやいや、そんなことはしてないけど。

E 秘密厳守だからね。

G 分かってるって。

B じゃ、なんで？ そもそも誰？

G ほら、今朝全校朝会で紹介があった…。

F あー、あの人。

E え？ でもなんで？

G ま、本人の希望っていうか。

B 希望？

G あ、とにかく急いであるから。詳しいことは後で。じゃな。(去りかけて空を見上げて) 嫌な天気だなあ

…。

G、大急ぎで駆け去っていく。

B 慌ただしいな。今朝紹介されたって、あの人だよね。

F 変わった名前の。

E うん。何の用だろ？

袖からGの声。

G おーい。

E 何？

G 小西、おまえに来客。

F え？ うち？

G その入り口んとこに立ってるぞ。

F 誰？

G 女の子。

B …入り口のはなこさん？

E 誰なんだ、それ？

B それとも猫のハッピーが化けている。

E どっから出てきた、その話？ だから、私たちの力は超常現象とか関係ないって。

F、舞台袖に入っていくが、袖で大きな声を出す。

F ちよっと、あんた、なんでこんなとこ来てんのよ？

E 誰？

追いかけてくるFから逃げて、Aが駆け込んでくる。

B 小西、その子…。

F すんません。妹です。

E え？ 妹って…。

A 彩香です。こんにちは。

E …こんにちは。

B …。

F あんた何しにきたんだよ。

A ふつつかな姉がちゃんとやってるかどうか、様子見に来たの。

F うるさいよ。

E よろしく、彩香ちゃん、萌子です。（Bに挨拶を促す）

B …美女です。

- E 何年生？
- A 4年生ですっ！
- F 何いばってんだよ。だいたい学校どうした？
- A 参観日の代休。
- F あー、そうだった。
- E 妹の予定くらい把握しときなよ。あ、彩香ちゃん、お菓子食べる？
- F あ、うちも！
- E あんたはさつき食べたでしょ！
- F うち、このへんに栗きんとん専門のブラックホールが。
- B そんな化けモン、うちでは飼えないよ。
- F あ、捨てないで。
- B あんたの能力って、むしろ異常な食欲なんじゃないの？
- F アニキーズ・ピザなら切らずに丸のままいけます。
- B もう。
- G 途中で悪いけど、いいか？
- A ……。
- F 何？
- A おねえちゃん、その格好すごいね。
- F う。
- B そうだ、小西、着物ちゃんとしないと皺になるよ。
- E 茶道部の畳の部屋借りて着替えな。
- F はーい。
- E 私も行くわ。
- B え？！
- E 小西一人じゃたためないでしょ、着物。
- B あ、いや、でもあの…。
- E Fが着物を着替えに去る。会話が途絶える。B、かなり気まずい。Aがちよこちよこと近づいてきて、Bの隣りに座る。B、びくっとなる。目が合う。Aがにこっとする。B、思わず目をそらす。かなり長い間。Aは茶道具で遊び出す。B、耐えられなくなって、通学かばんを開け、中から1冊ずつ教科書を取り出す。次第に間が持たなくなってぶつぶつ言い出す。
- B 数学Ⅰ。宿題はやった、よね？ えーと理科総合。国語総合。これも総合か。ニューホライズン…。
- A (いきなり) 子ども苦手？
- B ……はい？
- A 苦手なの？
- B 直球ど真ん中の質問…。てか、別に苦手なのは子どもに限らないんだけど…、
- A へえ。

間。

- B :あのさあ、2人つきりつてあり得くない？
- A ? どうして？
- B 何話していいのよ？ 間が保たないっていうか、いたたまれないっていうか…
- A ふうん。
- B え？ 彩香ちゃん、初対面とか平気な人？ そういうとき何話す？
- A わたし？
- B うん。 って、私、小学生相手に何マジで相談してんだ。
- A 名前何？とかー、何年生とかー、好きなこととか、あ、なんかして遊ぼっかって言って、遊ぶ。
- B そんなにあっさり相手のふところに飛び込めるものなのか。
- A おねえちゃん、美友さんだよね。
- B うん。
- A そういうふうに人が苦手だとさあ、触んなきゃいけない能力ってきついんじゃない？
- B は？
- A そうなんでしょ？ 美友さんの能力。
- B !
- E・F、戻ってくる。
- E 小西、茶道部で騒がないでよ。
- F いやあ、おまんじゅうが一個足りないって、これは事件じゃないすか。うちの出番。
- E ないよ、出番なんか。勝手に事件にすんな。
- F いや、血が騒ぐっていうか…
- B 小西！
- F は、はい？
- B 何しゃべってんのよ、あんた。
- F え？ 何が。
- B なんで彩香ちゃんが、私の能力のこと知ってんの？
- E ! ちよつと小西、しゃべったの？
- F え？ 何言ってるんすか。そんなしゃべるはず…
- B 彩香ちゃんが「触んなきゃいけない能力」って、私のこと。
- E 明らかに知ってるんじゃない。
- F いえ、あの…、おい彩香！
- E おい彩香じゃないでしょ！
- F いや、だって彩香は妹だし。小さい頃からうちの能力知ってるし。
- E そうだとしても！
- B そうそう、秘密厳守がうちの鉄則だったじゃない。
- F あー、もう！ ほんつとごめんなさい。でも、彩香もうちのこと絶対学校とかでしゃべってないはずだし。なんでいきなり今日来たんだか。でも言い訳しようがないっす。ほんとすみません。
- A ごめんなさい！

- E 彩香ちゃん？
- A 突然来て、変なこと言ったりして。
- B あー、いや、あの。
- A でも、絶対ほかの人におねえちゃんたちのこと、言ってません。信じてください。
- B あ、そうなの？
- F 彩香は大丈夫です。信じてやってください。
- E …彩香ちゃん、どうして今日ここに来たの？
- A …おねえちゃんたちに会いたかったから。
- E どうして？
- A 私…。
- F 彩香、なんかあったのか？
- A おねえちゃん、私、変になってきちゃった…。
- F は？
- B 何かが取り憑いたとか？
- E 今、そつちの話はいいから。彩香ちゃん、変ってどういうこと？ …私たちと関係あるの？
- A たぶん…
- E …あ。
- B 何ですか？
- E 彩香ちゃん、あなたも、もしかして？
- F ？
- G **G**が入ってくる。
- G お待たせ。
- F 別に博士なんか待ってないけど。
- E 今それどころじゃないから。
- G 忘れんなよ、お客さんだ。
- F あ、そうだった。
- G こちらへどうぞ。

一目見て外国人と分かる風貌でCが入ってくる。

- C ミナサーン！ イラッシャイマセー。カシコマリマシター。何名サマデスカー。
- E …何？
- G 今朝、紹介されたから知ってると思うが、今度赴任されたALT、つまりアシスタント・ランゲージ・ティーチャーの、ピカールさんだ。
- C ピカール・プララタモ・シヤヌミ デス。ヨロシク。
- B ほんとにすごい名前だな。
- G これから1年間うちで英語の授業のアシスタントをされる。アメリカからみえた。
- C アー、ワタシ、話スノガトテモ、アルファ。

- F アルファ？
- E ノー、ベータ。
- G 「話すのが下手」って言いたいんだろ？な。
- E へ？
- C 早く、スベスベニナリタイデス。
- F すべすべ？
- C 日本語スベスベ。
- G 「すらすら」。
- F あー。よく分かるね、博士。
- E ねえ、わざわざここへ、そんな挨拶しに来たんですか？
- C オー、ナイス・クエシヨン、芸者ガール。
- E 芸者じゃないです！
- C ソリー。アー、若女将（わかおかみ）ガール。
- E 旅館も経営してません。ただのガール。
- C オー、フリーガール？
- E …え？ 合ってるの？
- B よく分かんないです。
- C 私ハ、日本中アチコチALTYラシテ回ル予定デス。ソレハ、探シ求メル生徒ニ巡リ会ウタメデス。
- E 探シ求める生徒。
- C イエス。ソシテ、ラッキーナコトニ、一校目デ巡リ会イマシタ。イツツ・ユー、フリーガール！
- E ……何？
- F なんかご指名つすよ、萌子先輩。
- E いきなりイツツ・ユーって言われてもな…。それより、気になるのはさ。
- B はい？
- E 私、これからずっと「フリーガール」？
- B 訂正しといた方がよくないですか？
- E だね。えっと、私、萌子。
- C オー、ユー、萌エガール。
- E ー、そうくるかー。
- F 「お帰りなさいませ、ご主人様。」
- E うるさい。
- A (手を挙げて) はい、質問。
- C オウ、ドウゾ、プリーティ・ガール。
- E なんて私にプリーティ付かない？
- B 小学生ですから。
- A 先生は、どんな人に会いたいと思ってるんですか。
- C グッド・クエスチオン。リスンツミー。スペシャルナ 能力ヲ 持ツタ生徒デス。
- 皆 ……え？

間 皆、固まって、お互いの顔色をうかがう。

- G (おそろおそろ) 先生？
- C イエス？
- G スペシャルな能力って、例えば：
- F 栗きんとん早食い日本一とか？
- G おい。
- C キントウン早食イ？
- B 孫悟空、困りそう。
- E 栗きんとん。お菓子のこと。
- C ノー！ 皆サン、ソナナコトシテル人ジヤナイデショ？ ESP！ イワユル「超能力」デス。
- 間。
- G あのー、いきなり何を：
- C 隠ス必要アリマセン。私、インターナショナル・エスパ―・アソシエーション、略シテ「IEA」ノ者デス。
- E IEA？
- C 超能力ヲ持ッタ人ノ国際的ナ集マリデス。
- F そんなのあるんだ。
- C イエス。IEAハ能力ヲ持ッタ若者ヲ集メルタメニ、世界中ニ人間ヲ派遣シテイマス。
- G ちよつと待ってください。この子がどうしてそんな力を持つてるって分かるんですか？ もしかして何か新手(あらて)の新興宗教か何かですか？ 学校でそういう活動は困るんですが…。
- C 大丈夫。私ハ确实ニ能力者ノ存在ヲ感じ、見分ケラレル訓練ヲ受ケテイマス。今、コノ部屋ノ中で能力ノナイ人物ハ、先生、アナタダケ。
- G え？
- 皆、一斉にAに注目する。Gが目線でEに問う。
- E (うなづく)
- G、ゆっくり周りを見回しているが、見る見る何か恐怖に駆られた表情になる。
- G えつと…、あ、そうだ。書類のしめきりが…。
- G、恐怖の顔で慌てて出て行く。
- B なんで急に逃げてったんだ？
- E なんだろ。
- A (手を挙げて) はい。
- C ドウゾ、キユート・ガール。

- E キュートまで付いた！
- B いちいち食いつかない。
- A 私もおねえちゃんたちと同じってことですか？
- C イエス。
- A ほんと？
- C ホント。
- F ちよつと待って。彩香、…いつから？
- A 二ヶ月前くらい。
- F 確実なの？ うちが超能力の話とかするの聞いて、変な思いこみとかしてない？
- A (首を振る)
- F えー。
- E 彩香ちゃん、どんな力があんの？
- F それよ。
- A 寂しくなる。
- F は？
- A なんかな変な感じになる。よく分かんない。
- C ウマク説明デキナイノハ、チカラニ慣レナイカラ。ドント・ウオリー。アナタハ一人ジャナイ。
- A ほんと？
- C ホント。コレカラ、アナタノ能力ハ世界ノタメニ役ニ立ツノデス。
- A 役に立つ？
- C 恐レルコトハアリマセン。能力ヲ使ウコトヲタメラウ必要モアリマセン。皆サン、IEAノ仲間ニナツテクダサイ。
- E ちよつと待って！
- C イエス？
- E それって、能力をどんどん使えってこと？
- C ソウデス。
- F 事件解決するとか？
- C オフコース。
- F …やった！
- E え？
- B 超常現象を鎮（しず）めるとか？
- C 可能性アリマス。
- B そうなんだ。
- F なんだ、事件解決できるんじゃない。
- B 超常現象もありだって！
- E ちよつと待ってって。
- F そうやって萌子先輩が止めるから、うちら地味く活動しかやれなかったんじゃないすか。
- B 先輩、国際組織がGOを出してるんですよ。私たちもIEAに入れてもらって、これからはどんどん能力使いましよようよ。
- E いや、だから待ってって。中途半端な能力使うと、ろくなことにならないって。絶対。

F そうかなあ。
A ろくなことにならない…。
C 萌エガール！

C、つつかつかとFに詰め寄って。

C ソレハ、大キナ巻キ貝デス！！

間。

E 突っ込まないんすか？
F 空気読め。

C 引ッ込ミ思案ハ、日本人ノ悪イ癖。ソチラノ腹切りガール2人ヲ見習ッテクダサイ。
B 「はりきりガール」ね。

F 博士がいないと時間がかかるな。
E でも…。

C ドント・ウオリー！ 逆ニ聞キマシヨウ。能力使ウコトタメラウ、ホワイ？
E だって変な目で見られるだろうし…。

C イイジャナイデスカ。日本人、ツー・シヤイ。
E ……。

E イイデシヨウ。人前デ使ウノニ慣レテイツテクダサイ。デハ、マズ、皆サンノ能力ヲ見セテクダサイ。
F は？

B そういう展開になるか。
C デハ、ソチラノ、アー、売り切レガールカラ。

F 売り切れてないし。
B てか、そっちの方が悲しくないか。
F あ…。

C ヘイ、カマン。

F えっと、何って言われて胸張って答えられるほどのレベルじゃないんすよねー。
E 小西、その自信のなさが一番障害になってるんだって。

F 萌子先輩、能力使うの反対派じゃないんすか？
E 持ってる力をコントロールできるのは大事。

F うー。
A ほら。おねえちゃん。

F ほらって言われても。パスしちゃだめすか？
E だめ。

C 能力ハ何？
F ……透視？

C オー。ヤッテ見セテ。
F えー。

- E いい機会じゃん。人に見てもらわなくて普通はできないんだから。
- F …はい。じゃあ、先生、紙に、字でも絵でもいいから…、あ、でもほんつとに当たる確率低いんで…。
- B 言い訳はいいから。
- F …。じゃあうちに見せないように何か書いてください。

F、後ろを向く。C、紙に何か書く。

E はい、がんばって。

F、変な格好をさんざんして力を振り絞る。

B さりげなくいけんのか。

F ほっといてください。

F、へとへとになって結論を出す。

F アルファベットの「J」。

C、紙を広げる。

C 残念。ナイキノマーク。

F えーっ。

E それさっき書いたの？

B そっちの方が超能力じゃん。

C ハイ、ジャア、ネクスト。

F おいっ。

A おねえちゃん、ファイト！

C、次のを書く。F、また力を振り絞って読み取る。限界に近い。

F カタカナの「キ」。

Cが見せると「キ」と書いてある。ただし、斜めの縦棒が逆の傾き。

F やったーっ。

A おねえちゃん、ナイス！

C ブーツ。

F なんでよっ。

C 「平行線ニ交ワル直線ノ錯角ハ等シイ。」

F 分かるかっ！

F、力尽きて倒れる。

C デハ、モウ一人ノ、シー、アレッキリガール。

B あれつきりって。なんか寂しい。

C アナタノ能力ハ？

B あ…、えーと…。

間。

E 「好きな食べ物！」

C 好きな食べモノ？

E が強引にBの手を持って、Cに触らせる。

C ナニナニ？！

B …ロールケーキ。

C …ナルホド、タッチスルト相手ノ頭ノイメージ、読メルノデスネ。

B はい。

C グレイト！

B あ、でも…。

C ホワット？

B 先に質問してからじゃないと、それが何を表してるか分かんないし。

C ソウデスネ。

B しかも、私人見知りだから、質問するのも触るのも、ものすごいハードル高くって…。

F なのに、うちにはきついきつい！

B 小西、復活したと思ったらそれか！

F ほらー。

C ナルホド。ドン・ウオリー。ジャ、最後ニ、萌エガール。

E せめて、ナイス・ガールとかさあ。

A まだ言ってる。

F 萌子先輩は、瞬間移動。

C 瞬間移動。

A あれだね？

F あっという間に別の場所に物を移動させるの。すごいっしょ？

A すごい。

E 小西、それちよつと大袈裟じゃない？

F ほお、ほかにどんな説明が？

E うーん。…よし。（手をたたく）先生、ポケットのボールペン貸してくれます？

C オーケー。アレ？

E これ。

C オー、イツノ間ニ？

E ちよつとだけ時間を止めてるんです。その間にこういうちっちゃいものを自分の方に持ってくる。瞬間移動って言うのと大袈裟でしょ？

A 時間を？ 止める？

F 言ってなかったっけ？

C ウェイト！ 萌エガール、何テ言イマシタカ？ 時間ヲ止メル？

F ね、ほらほら、さすがのピカール先生も驚いてる。

C サスガ東洋ノ神秘ノ国、ジャパン！ タイム・ストップパー、コレハ、給食ノ能力デス！ 究極。

B もう分かるのはスルーしません？

E …何が究極の能力？

C イエス、ソレハ…

E こんな究極でもなんでもない！ こんな…、こんな能力なんかあったって…。

F 萌子先輩？

B どうしました？ 「こんな能力」って。

E …あ、いやそのつまり、うちの能力って、結局みんな中途半端なんです。私も2人とそんなに変わらない。調子が悪いと全然だめだし。使おうって思っても思い通りになりません。だよね？

F そういう意味か。

B …だから、こうやって集まって修行っていうか、力を高めようとしてるんですよね。

C ナルホド。サッキノ先生ハ？

E 科学的に私たちの力を分析してもらってます。

A 分析って？

F なんかいりいろ調べられんの。

B 力を高める方法が分かるかもしれないから。

C …へエ。

B 何？

C アナタモ、チカラヲ高メタイ？ 萌エガール。

E え？ あー、もちろん…、あ、そういえば！

F 何？

E 先生にはどんな能力が？

F あっ！

B そっか。それ聞いてない。

A うん。何々？

C ワタシノ能力ハ「予感」デス。

B 予感？

E えっ？ まさか予知能力ってこと？

F すげーっ！

C イエ、勘違イシナイデ下サイ。自由自在ニ未来ガ分カルワケデハナイ。日本語デ言ウ…「牛ノチラシ」デス。

- B : 「虫の知らせ」？
- F 吉野家の新メニューかと思った。
- A 虫の知らせって？
- E なんかの事件の前に、「あれ？もしかして…」って感じることに
A へえ。
- C 予感ガスルト、大概当たりマス。
- F それだってすごいじゃん。
- C デモ、私モ自分デコントロールデキマセン。
- F : コントロールできないとどうなるの？
- C 絶対、前モツテ知リタクナイコト、「予感」シテシマイマス。
- B 例えば？
- C レストラン入りマス。注文シマス。料理出デクル直前ニナツテ「ア！コレ絶対マズイ」分カツテシマ
ツタリ。
- E なるほど。
- A 使えないのは同じか。
- F 悪かったな。
- C 超能力ニパーフェクトハナイトイウコトデス。普通ノ人ノ能力ニパーフェクトガナイノト同ジ。
- F いいこと言う！
- C アッ！
- A 何？
- C 予感ガシマス。
- F 早速？
- C 誰カガココニヤツテキマス！
- F 誰誰？
- C (念じて) 女ノ子デス。シー・ハズ・ベリー「スイート・ネーム」。
- F スイート・ネーム？
- B スイートって？
- F レディー・ガガとか、アンジェリーナ・ジョリーとか。
- B セクシーとは違うだろ。
- F じゃ誰すか？
- B もっとかわいい系？
- A 芦田愛菜ちゃん！
- B なんで姉妹(きょうだい)して芸能人が来るって決めてんの？
- F でもうちの学校でスイートな人って？
- B うーん。

期待が高まるME。ひょこつと顔だけ出した人物がGだったのでみんながっかりする。

- F えー、博士？
- B 予感、はずれ？

- C イイエ、コノ人ノコトデハナイ。
- E 違うの？
- B 博士、何か用？
- G あ、ちよつと理科室の鍵忘れたみたいなんだけど…

Gの白衣のポケットが全部ぱんに膨らんでいる。周囲をおどおどと見回しながら、部屋の中を探し回る。

- F 何、そのポケット。
- G ちよつとな。用心のために。
- B 用心って？
- G 聞くな。あれー、どこに置いた？ もしかして俺持ってたのか？

Gは、体のあちこちを探す。ついに白衣を脱いで客に背中を向けた状態で、ポケットを確認する。ズボンの後ろからしつぽのようにタオルが垂れているのが見える。ちよちよことAが近づいて、それをぴつと取る。G振り向いて、Aを見てびくつと、しばらく見つめ合う。

- G 返してください。（土下座）
- E なんで土下座？

Aはタオルを返す。

- G ない…みたいだな。あの、ピカール先生。
- C イエス？
- G 打合せがそろそろなんで。また迎えに来ます。あ、さっきのなんとかいう組織の話は内密に…。
- C オフコース。シー・ユー・レイター。

Gは去る。

- E なんか挙動不審じゃない？
- B ポケットも変だし。
- F どうしたんすかね？

Fが戸口まで様子を見に行くと、「あーっ」と声を挙げて戻ってくる。

- B 小西、どうした？
- F あの、あのあの…。
- E 何？

そろそろDが入ってくる。剣道部らしく、竹刀のバッグを提げている。

- D あのー、こんにちは。
- B E F 佐藤さん！
- C オー、ミス・シユガー。
- B その「砂糖」じゃないから。
- E …それでスイートネームか。

FとCがきらきらした目で**D**を見つめて左右を挟む。

- F ああつ、全校の憧れ、佐藤先輩！ ここに何の御用ですか？ ああ、事件の臭い！
- D 事件じゃないけど、えっと、用っていうか…
- F とにかくどうぞどうぞ中へ。
- C 東洋ノ神秘！ 性別ヲ超エタ美シサ。イケメンデスネ。
- D あ、どうも。女ですけどね、念のため。
- F しかも剣道三段つす。
- C オー、サムライ・ザ・ビューティフル！
- E 佐藤さん、あいかわらずもてるねー。
- D 女子校だからね。3年間、ずっとこんな感じだし。
- E 女子が女子にキヤーキヤー言うってどういうんだろね、美友。
- B …。
- E 美友？
- B すいません先輩！ 実はあたし！
- E おいつ。

Bも耐えきれない様子で**D**の周囲に駆け寄って目をきらきらさせる。

- B ああ。佐藤さんの頭上に天使が見える。
- E 美友まで…。びっくりしたねー、彩香ちゃん。あれ？

Aは既に、**D**のそばに寄って目をきらきらさせている。

- A おねえちゃん、かっこいい…。
- E …佐藤さん、あんたほんとすごいわ。
- D どうも。
- E で？ ここに何か用？
- D いや、ちよつと通りかかったっていうか、えっとここってどういう？
- E ん？ いやあ、あのちよつとした同好会っていうか。
- D あ、そうなんだ。やっぱりちよつとマニアック系の？
- E あー、ハハ、まあそんな感じ。
- D 3年って萌子一人？
- E そうだけど？

D あ、ふーん。
E ……何？
D あの、てことは、代表者は萌子ってこと？
E うん、そういうこと、だね。
D そうなんだ。
E うん。
D ……あのさあ。
E うん。
D 萌子にちょっと聞きたいんだけどさー。
C アッ！
F 何？
C アー、佐藤サン、ソリー。

Cが、**D**以外の人物を反対側に呼び寄せる。

A もしかして予感？
C イエス！
F 何々？
C コレカラ、ラブ・アフエアガ始まりマス！
E ラブ・アフエア？
F 何だっけ？
A 恋愛事件！
E え？
B ……てことは、佐藤さんが萌子先輩に聞きたいことって…。
F まさか！？ 「私のこと好き？」
E 馬鹿言わないで。
F じゃあ、確認してくださいよ！
E えー。…あのー、佐藤さん？
D うん。
E 聞きたいことって、…何？
D あ、えっと、あー、でも恥ずかしい。
F ちよっとー！ 顔赤くしてんじゃないすか！
B 萌子先輩、私、明日、呪いのお札作ってきます。
E なんて私が呪われんのよ。佐藤さん。
D うん。
E 恥ずかしいって、まさか「告る」とかそういう系の話じゃないよね？
D え？ あ、いや、その…
E どうなの？
D ……なんで分かった？
E うわー！

A B C FがEをにらんで迫る。

- D え？ やっぱり迷惑？
- E 迷惑っていうか、私、ノーマルに男がつていうか。
- D は？
- E え？
- D 何の話？
- E いや、だから、えーと、佐藤さんが。
- D うん。
- E 私に、：告りに、来た？
- D は？ なんて？
- E え？
- D ボクが？ なんて萌子に？
- E 違うの？
- D え？ 萌子そういう趣味？
- E 違うって！ ：じゃ、「聞きたいこと」って？
- D あー、ボクが好きな人に関する情報：、あ！ 言っちゃった。
- E なーんだ。ほらほら、みんな、やっぱり誤解じゃない！
- F やっぱ萌子先輩が相手ってあり得ないし。
- B よかったー。
- A どきどきしちゃった。
- C デメタシデメタシ。

間。

- A B C E F えええええっ！
- F ボクの好きな人って言った！
- E 佐藤さんが恋してるんだ！
- A 誰誰誰誰誰！？
- C オー、ラブ・アフエア、ゴーズ・オン！
- B やっぱり呪いのお札作らなきゃ！
- D ちよっとみんな落ちついて。
- F 佐藤さんの好きな人って？
- E なんで私に聞くの？
- D いやー、んーとね。
- B 萌子先輩のお兄さん？
- E お兄さん、いないし。
- F お父さん？
- E ありえないし。

C オ母サン？
E なんてよ！

A 誰誰誰誰誰誰！？

F はいはいはい！

B 耳元で叫ぶな。

F 佐藤さんなら、相手が誰だろうが、いきなり告白しようが、全然大丈夫じゃないすか？

A うん、大丈夫大丈夫。

B あー、そうだなー。情報とか要らないよなー。

C アタナナラ 活発 ヤク中 デス。

E ヤク中は活発じゃないよね。

B 百発百中。

F そうそう百発百中つすよ。

D いやいやいやいや、無理無理無理無理。

F えーっ。

B なんて？

D なんてって…、そんな勇気ないって。

B は？

F 豊富すぎるくらい経験あるつしよ。

D ないって。

E 嫌味。

F どんだけ告られてきたんすか。

D え？ 告られる方だったら…、ほら。

D は、ポケットからラブレターをぞろぞろ取り出す。

A あーっ、ラブレターだ。こんなに。

F 生ラブレター初めて見た。

C 日本人、ラブレター持ち歩キマスカ？

B まさか。

D 教室からここまで来る間に、こんだけ渡されたの。

E はあ？

B 高校生活ハーレム状態…。

M E。照明変わる。劇中劇。

F 佐藤さん、クッキー焼いたんです、食べてください。

D あー、ありがとう。

A 佐藤さん、蕎麦打ったんです。食べてください。

D あー、ありがとう。

B 佐藤さん、ブレザー編んだんです、着てください。

- D あー、ありがとう。
- C 佐藤さん、家建てたんです、住んでください。
- D あー、ありがとう。みんな、やさしいなあ。
- A B C F 衣食住お世話します！
- D ありがとうありがとう。ぼくはしあわせだなあ。（前髪をはらうとシャラランとSE）
- A B C F キヤー。
- D ぼくもみんなを、しあわせにするよ！（ポーズを決めて笑うと白い歯がキラッと光るSE）
- A B C F キヤー。
- D ボクと永遠のパラダイスに行こう。さあ、みんな手をつないでーっ。

皆で手をつないで輪になり、にこやかに笑いながらくるくる回る。照明戻る。

- D アハハハハ、アハハハハ、アハハハハ…。つて、ぼくは何者だっ！
- B よくそこまで乗れるな。
- F やはりモテる人は違う。
- D そもそも、告られるのと告るのは根本的に違うでしょ。
- F てことは…。
- C コスツタコト ナイ？
- B 告った。
- E ないの？
- D うん。
- B C F あー。
- A どういうこと？
- B あれじゃない、ほら、ボクシングのハードパンチャーが、いつもすぐノックアウトしちゃって自分が打たれた経験はないってのと同じ。
- F なるほどー。
- E いや意味分かんない。
- A イケメン女子の意外過ぎる素顔！
- E 彩香ちゃん？
- F で結局誰なんすか、相手は？
- D いや、だからそれは…。
- G 入るぞー。

いきなりGが入ってくる。照明変わる。感動的なME（歌入り 平井堅とか）。はっとして、憧れの目でGを見つめるD。サスの中で見つめ合う2人。ストップモーション。驚愕する周囲。Gは基本におびえた感じがぬぐい去れないまま。

- G （何も感じていない）おー佐藤。じゃ、先生、そろそろ職員室に。
- C エ？
- G 用事はすんだでしょ？

- C イイエ！
- G え？ まだ何か？
- C コナ面白イ展開、見逃セマセン！
- G は？
- E 博士、ちよつとごめん。
- G なんだ？
- E 女子限定の話があるからさあ、ちよつと部屋から遠いところでゆーっくり百数えてきてから来てくれる？
- G なんだよ、子どもの風呂じゃあるまいし。
- B はいはい、すぐ言われた通りする！
- G おまえら、ほんといい加減にしろよ。敬意を持ってって。
- F 行って、行って！
- G なんか、俺さつきから出たり入ったりしてないか？
- G、ぶつぶつ言いながら去る。皆がその後ろ姿をじっと見つめて、見えなくなった瞬間に。
- B C E F 佐藤さんっ！？
- D うわ。
- F もしかして博士なんすか？
- D …うん。
- B なんだ？
- D なんてって言われても…。
- A ねえ、どういうこと？
- F 佐藤さんの好きな人って、博士なんだって。
- A え？ さつきのむさ苦しい人？
- F そう！
- A 衝撃の不条理愛！
- B 不条理？ 小西、ほんとにあんたの妹？
- F ほつといてください。あー、でもショック！ どうしてよりによって？
- E 佐藤さん、確認するけど、教えてほしいって、博士、永治先生のこと？
- D うん。
- B だから、この部屋に来たんだ。
- D こしばらく永治先生がこそつと職員室から出るから、後をつけたんだ。そうしたら、いつもこの部屋に入るから…。
- C ナンテ ハンサムナ ストーカー！
- D ねえ、なんで永治先生はここに来るの？ あんたたち、先生と何してんの？
- F もしかして嫉妬？
- D え？ いや。そういうんでもないけど。萌子、結局この部屋で何してんの？
- E ーと、だからさつき言ったけど、同好会みたいなものもんで、博士には…顧問的なことをしてもらってる。
- D その同好会って、要するに何？ あ。茶道部？
- E 茶道部は別にあるから。

- F 茶道は精神集中のためです。
- D 精神集中？
- B あ、てか、精神力を高めて、えっと…。
- F 事件とか解決したり！
- B え？
- E ちよつと。
- D あ！もしかして探偵クラブとか？
- E いや、ていうか。
- D そっか、萌子、ずいぶん本とか読んでもんねー。ミステリークラブってこと？
- E あのね…。
- D あ、ごめんごめん。分かる分かる。そっかー。
- E 何が？
- D いろいろ調査とかするのにな、顔がばれてたらだめだもんね。そっかー、だからこっそり活動してたのか。
- E ちよつと佐藤さん？
- B なんか誤解が。
- D いい、いい。いろいろ聞かないから。
- E いや、どっちかっていうと聞いてほしい。
- D じゃあさあ、ボク、依頼人になる！それでお互い利害一致しない？
- B 一人で突っ走る人だなー。
- D もちろん依頼内容は、永治先生について。誕生日や家族構成。住所とか電話番号。
- C モシカシテ、リアル・ストーリーカー？
- A ゆがんだ愛の果て！
- D 好きな食べ物、趣味特技、身長、体重、それと靴のサイズ！
- G 百！

いきなりGが顔を出すので皆びっくりする。

- B どんな足してんだ？
- G は？
- E 何いきなり？
- G おまえが百数えろって。
- E あー。
- G あーじゃない！いいのか、もう入っても。
- E えーと、ごめん。あと二百数えて。
- G なんてだよ。
- F はいはい、しっしっ！
- G はあ？ いい加減にしろよ。

G、去る。

- D どう？ やってくれる？
- E ちょっといい？ 相談するから、少しそっちに離れててくれる？
- D あ、うん。分かった。

Dが隅にぽつんと離れ、他は固まって相談を始める。

- E ねえ、どうする…って、その前に、なんで先生入ってるんですか？
 - C 仲間ハズレ、ソー・サッド。
 - E 大人でしょ？
 - F いいじゃないすか。
 - E 彩香ちゃんは、話の流れ分かっているの？
 - A すっごいおもしろそう！ 『女性自身』みたい。
 - E それか、情報源は！ 小西、読まずなよ、そんなもん。
 - B とにかく、いろいろ問題がありすぎると思うんですけど。
 - E だよね。
 - F 探偵クラブと思ってますしね。
 - B お前が事件とか言うからだろ！
 - F そうでしたっけ？
 - B …もしかして喜んでる？
 - F (にや) 分かりますか？
 - B おまえ！
 - F いや、だって、全校のアイドル佐藤さんの告白を助けるんですよ。まさに大事件！
 - B 事件じゃないって。
 - F 美友先輩、調査の間は佐藤さんとお近づきになれるんすよ。これは事件でしょ！
 - B …あ。佐藤さんとスピリチュアルな関係が…。
 - E おい、美友。
 - A やるしかない！
 - C ワタシタチノ、チカラノ台所デス。
 - E え？ 能力使う気？
 - C オフコース！
 - E なんて能力に対してそんなにためらいがないのかな。
 - F じゃ、決まりってことで。
 - E まじ？
- EがDを呼び寄せる。
- D どうなった？
 - E …一応、協力します。
 - D やった！
 - E たださあ。

- D 何？
- E 私、経験不足でよく分かんないけど、情報があつたら告げるもんなの？
- D え…。
- A 萌子さん、するどい。
- B たしかにそれで告げるなら、ストーカーはいなくなるよな。
- D でも、なんか知りたいたんだよね、とにかくいろいろ。本能的に。
- F 本能的に…。
- A なんか生々しい。
- E 佐藤さん、じゃあ一番は何が知りたい？ 靴のサイズとかほんとに大事？
- D うーん。
- C ポツキリ言いなさい。アナタノ知りタイノハ、メイビー・オンリーワン。
- D ねえ、この人、今日来たALTの人だよな。なんでここにいるの？
- C 気ニシナイ気ニシナイ。
- A 頼みたいこと、ずばつと頼んじゃおうよ。女は度胸。
- D もつと分かんないのはこの子なんだけど。
- F とりあえず、それは今おいといて。
- B そろそろ博士来ちゃうから。
- E 佐藤さん、本当に知りたいのは何？
- D …ボクのこと、どう思ってるか。
- 皆 …だよな！。
- D あ、でも、あんまりずばつと聞かれても…。
- A さっきの様子だとー、とりあえず何とも思っていないっていうかー、恋愛対象じゃないって感じ？
- E (Aを見つめて)…。
- D あー、でもそうだよなー。ボク一体どうしたいんだ。
- F とりあえず、ちよつとでも脈があるかどうかを探ればいいんじゃないですか？
- D できる？
- F やりましょう。
- E おい！
- F うちに考えがあります。ちよつと来てください。

BEFだけが隅によって相談。

- F いいですか？ 博士が来たら、うちが博士を透視します。
- E なんて？
- F 博士の白衣のポケットって、なんかさつきから膨らんでるじゃないすか。で、透視してポケットの中に入ってるものを確かめるんです。で、話題をさりげなく、それを取り出すような方向に持っていく。
- E その時点で無理があるような気がするぞ。
- F 最後まで聞いてください。で、博士がそれを取り出す前に、同じポケットに萌子先輩が、佐藤さんの写真を瞬間移動させておく。そして、博士が「あれ、なんでこんなもん入ってた」とか言って、その写真を見た時に、美友先輩がイメージを読む。…どうです？

- G もういいか？
F 博士、絶倫すね。
G は？ 話は終わったのか。
E まあ、一応。
G そうか。あ、先生、そろそろ英語科の打ち合わせが始まると思うんで。
C チョット待テクダサイ。
G いや、でも英語の主任が。

押し問答している間に、背後でFが奇妙な格好で透視を始めている。

- B 打ち合わせくらいいつでもできるんじゃないの？
G 仕事の話に口を出すな。
E 英語の打ち合わせなのに、なんで博士が呼びに来てんの？ あ、もしかしてパシリ？
G おまえらレベルの発想で俺を見るな。
F ううっ！

Gの背後でFが倒れる。BとCが駆け寄る。

- B どうした？
C アー・ユー・OK？
F やっぱうちだめですわ。
B 何が？ 見えなかったの？
F 見えたんです。でもそんなのあり得ないし。
C アリ得ナイ？
B 何？
F 全部のポケットにみっちりてるてる坊主が。
B は？ たしかにあり得ない。
C ペロペロ坊主？
F 坊主が何なめるんすか。あー、修行は無駄だったんだなー。
G おい、大丈夫なのか？
A 博士ー。
G ん？ 君まで博士って…。
A なんかポケットばんばんだけど、何が入ってるの？
G あー、いや、これは。
A 見せてー。
G うーん。

G、しびしび中身を出す。すべてのポケットからぞろぞろとてるてる坊主を出す。

- E げ？ 博士、何入れてんの？

F 合ってた…。

C (Fに向け、親指を立ててグッジョブ) アレガ坊主？

F 雨が降らないおなじまい。

B 博士、なんでそんなの持ってるの？

G そりゃ、雨が降らないようにだよ。

B そのまんまじゃん。

E 科学者でしょ。ポリシーに反しないの？

F そもそも持って歩くものじゃないじゃん。窓とかに掛けとくもんじゃない？

G しょうがないんだよ、俺集中で雨が降るんだから。

E 俺集中ってどういうこと？

G (おびえた顔でAを、そして周囲を見る)

E どうしたの？

G 昔、変な女の子がいてさあ、からかったことがあるんだよ。

B 変な女の子？

G その子の周りでいろいろ変なことが起きるんだ。あれ、今思うと、絶対能力者だったな。

E それで？

G からかった翌日だったかな。学校の帰り道で、何人かに囲まれたんだ。

E 囲まれた？

F 殴られたとか？

G もっと悪い！ 俺のところだけものすごい雨が降ってきたんだ。逃げても逃げても、俺の上だけバケツの水をひっくり返したみたいだった。寒さと恐怖で三日寝込んだ。

B 柄にもなく、女の子いじめたりするからだよ。

C 能力者が集マッテ、リベンジシタンデショウネ。

E それで？

G なんか、それ思い出すんだよ、女の子がいて、こんなに能力者だらけで。

B だからって、理科の先生がそんな非科学的でいいの？

E あ、(手をたく) もしかして、そのトラウマがあるから能力の研究やってんの？

G ……。

F てるてる坊主ねえ。

G (どんどんてるてる坊主を取り出しながら) 悪いか？ とにかく雨が追いかけてくるんだから、自分で持っていないとな。ま、どうやら今日は大丈夫みたいだけど。あれ？

G、ポケットから写真を取り出す。B・F、あつという顔でEを見る。E、目でうなづく。B・F、グッジョブ。写真を見つめるGの背後から、BがEに視線で促されて、やっとそっと触る。B、困った顔。

G 佐藤？

E え、写真？

G なんてこんな写真が？

E 私に聞く？ こっちが聞きたいよ。

などとGとEとAが会話している間、同時進行で。

B 佐藤さん。

D はい？

B 「16」っていう数字に記憶があります？

D 16？

B できれば、博士がらみで。

D あ！

F 何？

D 物理の期末考査の点数。

B それか。

F 意外と成績悪いんだ。

C ガッデム！ ユトリ教育！

B たぶん、それと関係ないから。

その間に、GがDに気付く。

G あれ？ 佐藤、まだいるのか。

D あ、はい。

G 萌子に何か話でもあったか？ 何か用事か？

D 用事っていうか。

E 博士！

G 大丈夫言わないって。

E そうじゃなくて。

G は？ あ…、もしかして佐藤、この部屋のこと知ってるのか？

D あ、はい。

G そうなのか。じゃ、おまえ何か俺に話か？

D 分かりますか？

G あ、それですつとここにいるのか。

E 博士、あのね。

G 佐藤おまえ。

D はい。

G そうなのか？

E いや博士、佐藤さんは…

D …はい！

G そうだったのか。知らなかった。

D 分かってもらえましたか？

G うん、いや、3年間気がつかなかった。

D ずつと心に秘めていたんで。

G そうか。まあ、おおっぴらに言うことでもないよな。

- D なんか恥ずかしくて。
- G うん、分かる分かる。
- B いや、分かってないと思うよ。
- G そりやまだよくは、な？ 分かってないけど、これからな、おいおい詳しく知っていけばいいからな。
- D はい！ それって受け入れてくださるってことですか？
- G 受け入れる？ ああ、もちろんもちろん。
- D やったーっ！
- B やってないから。
- E 話がややこしくなっていく！
- A 愛の糸はもつれにもつれて。
- C アッ！
- E どうしたんですか？
- C 予感ガシマス。
- E もしかして天の助け？
- B どんな予感？
- C コノ後、話ハ、マスマスヤヤコシクナリマス。
- F うわーっ。
- G そうと決まったら、佐藤に早速頼みたいことがあるんだが。
- D はい！ なんなりと。
- E なんて従順なんだ。
- F ファンをめろめろにした姿は見る影もないっすね。
- B なんか悲しい。
- G ちよっとね、理科室に来てもらいたいんだが。
- D え！ 二人きりですか？
- G あ、やっぱまずいか。
- D いえ！ 大丈夫です。理科は得意じゃないですけど。
- G あー、16点じゃなあ。
- B よっぽどそれしか印象にないんだな。
- A 佐藤さん、かわいそう。
- D で？ 何するんですか。
- G うん。体に電極つないで脳波とか脈拍とか採らせてもらいたいんだわ。
- D ええっ！ そんな…。
- G ちよっと科学的に詳しく知りたいんでな。
- D 科学！ 科学者はそんなプレイを…。
- G プレイ？ いや、調査っていうか、実験っていうか…。
- D どうしよう、そんなマニアックな世界にいきなり。
- G あれ？ 萌子、そういう話はしてないのか？
- E あ、いや、博士、ちよっといい？
- G 第一号はおまえなんだから、ちゃんと説明しといてもらわないと…。
- D 第一号！ じゃ、私は二号さん？

- G 「二号」？ 「さん」？ いや、えっとまあそういう言い方するなら「四号」、かな？
 D 四号！！
 E あのね、佐藤さん。
 D 先生もしかして萌子とさっきの「実験」を…。
 G うん。何度かね。
 D ああつ！ 萌子、ほんと？
 E 佐藤さん、ちよつと落ちついて…。
 G 萌子だけじゃないぞ。美友も小西もずっとやってる。
 D えええつ！ そんな！
 G いや、すまん。そんな拒否反応があるなんて。
 D そうだったのか…。
 E ちよつと聞いてくれる？
 D 三人とも、ボクをだましてたんだね！
 B 佐藤さん？
 D 協力するようなふりをして！ 人の気持ちを弄（もてあそ）んだんだね！
 A 先生、予感もろ当たり。
 C イエイ！
 E イエイじゃないって！ 佐藤さん、説明させて。
 D いいよ！ そうか、みんなしてボクを笑ってたんだ。先生がこんなチャラ男（お）だって分かってて。
 G チャラ男？
 D そうじゃないですか！ ボクも入れて四又（よんまた）かけてるじゃないですか！
 G え？ 君ら、こういうのを「四又」って言うのか？
 D こうなったら…。
 F 佐藤さん、何か考えてないすか？
 A 何だろ。
 C OK。ファイト！ アレッキリ・ガール！

Cが強引にBの手をつかんでDに触らせる。

- B うわわわわっ！
 F どうしたんすか？
 B 佐藤さんのファン全員にメール一斉送信。
 F で？
 B 大集団がこの部屋に押し寄せる！
 F げっ！
 B ねえ、小西、佐藤さんの携帯どこ？
 F ええと。（**必死に変な格好**）ああつ、見つからないっ。
 B もう！
 F なんかごちゃごちゃいろいろ入ってて。

Dは、つかつかと自分の荷物のところへ行き、竹刀のバッグを取り上げる。そして、竹刀を取り出して、メー
ールを打ち始める。

D みんなボクをばかにして！ ボクを誰だと思ってるんだ！

F あの佐藤さん、もしかしてそれって？

D 携帯。

F そっちはーっ。

B 今のは仕方がない。

D アンドロイド・剣道バージョン。(送信)

G 佐藤！ 結局何を怒ってるんだ？

E 落ちついて、佐藤さん、誤解だから。

D 何が誤解だ！

竹刀をかまえるD。驚く周囲。

G ちよつと待て、佐藤！

D 今からボクのファンがここに駆けつける。その大勢の前で、あなたたちの仕打ちを明らかにする。

E ねえ、落ちついて。

D ボクは落ちついてる。みんなの目の前で、ボクが天誅を加える！ この人でなしどもに！

C 佐藤サンナノニ、辛口。

G なあ、俺が何かしたのか？

D 何かだって？・・・先生、あなたには心ってもんがないのか。

Dが竹刀でGにうちかかろうとする。皆、大騒ぎして逃げ回る。時間を止めようとEが手を叩くが止まらない。焦るE。二度三度と繰り返しても止まらない。頭を抱えるEめがけてDの竹刀が振り下ろされようとする。その瞬間、Aが手を叩く。S E。一気に照明が変わって、全員の動きが止まる。ややあって、Eが、続いてAが動き出す。ゆっくりと周囲を見回し、互いを見つめて。

E 彩香ちゃん？

A 萌子さん。

E そっか、彩香ちゃん的能力って…。

A 萌子さんと同じ？

E …そうだね。ありがとう、助けてくれたんだね。

A 助けたのかな。

E そうだよ。止めてくれたんでしょ？ 時間。

A いつもは勝手に止まっちゃう。自分で「止まれ」って思って止まったのは初めて。

E そっか。びっくりした？ 最初。

A うん。話しかけてもだーれも答えてくれないし。いつも、動き出すまでじーっと待ってる。

E そっか。寂しいね。でもさあ、わりといるのかもしれないね、この能力。博士のさあ、自分のところだけ雨が降ったって言うってたのも、絶対この能力使ったよね。時間止めてる間に、上に水をばーって。

A そっか。…でもどうするの、これから。
E どうしよう…。中途半端に時間止める能力があってもき、こんなことになっちゃうんだよね。
A ……
E 決めた。私ね。ずっと先延ばしにしてごまかしてきたことがあるの。それは能力とは別のこと。でも、ごまかすの、もうやめる。彩香ちゃん、見てくれる？
A 何のこと？
E 時間が止まった中で誰かとしやべったのは初めて。なんか、見つかったって気がする。
A 見つかったっちゃ…。
E うん。もうごまかせないぞ、小さい子まで見てんだるぞって、誰かに言われたみたい。…じゃ、戻そっか。あ、これは預かついてと。

EはDの竹刀を手から外す。それから深呼吸して手を叩き、皆が動き出すのと同時に、大声で叫ぶ。

E みなさん！ ごめんなさいっ！！

B え？

F 萌子先輩？

E 佐藤さん、私たちは探偵クラブじゃないの。博士ともそんな関係じゃない。すごくすごく誤解させてるの。ごめんなさい。今から全部話すから。

B いいんですか？

E うん。それと、美友、小西、あと博士。

G 付け足しかよ。

E みんなにも、ずっと隠してきたことがあるの。聞いてくれる？

F 隠してたこと？

E …佐藤さん。信じられないと思うけど、私たちは超能力を持ってるの。

D 超能力？

E からかっけるとか思わないでね。それと、できれば他の人には言わないで。

D (周囲を見回して) 本当…みたいだね。

E それでね。私の能力は時間をちよっと止められることなんだけど、私はそれがすごくすごく嫌だった。

B 萌子先輩？

G そうなのか？

E 時間が止まってる間って、究極の孤独なんだ。彩香ちゃんが寂しいって言ったけど、寂しいどころじゃない。
ない。

C ウェイト！ キュート・ガールモ…

F 彩香？

A うん。

E そう。たった今、分かったの。でもね、先生は究極の能力って言ったけど、そうじゃないと思う。時間を止められても、時間の外には出られないの。

G 時間の外？

E 人生の外って言った方がいいのかな。私一人が動けてもさあ、みんなの時間が止まったら私の人生も止まってるんだよ。それが分かっただけからさあ、こんな能力意味ないなって思ったの。なくしちゃいたい

なってる思ったの。

F えっ！ なくしちゃいたいわって。

B それじゃ、萌子先輩…。

E うん。美友や小西と一緒にいるのも、博士に調べてもらってるのも、ほんとには、能力の正体があったら、なくす方法が分かるんじゃないかって、そのためなんだ。

G そうだったのか。

C オー、萌エガル…。

F でも、でも萌子先輩、あんなに一生懸命、茶道とか…。

B そうですよ、あれって何だったんですか？

E 二人がさあ、能力を高めたっていう気持ちは大事にしたい、これはほんと。能力を高める方法と、なくす方法はたぶん同じ、だからこれでいいんだって、そう自分に言い聞かせてきたけど、これはごまかしだった気がする。ごめん。

F ごまかし…

B そうなのかな…

E そのこと、ずっと言わないまま今日まで来ちゃった。言おう言おうと思ってたのに。ほんと、ごめんなさい。：佐藤さんもごめんなさい。能力のこと隠してたせいで、いろいろ誤解させたの。まだ腹が立つてるなら、いいよ、これで。

E はDに竹刀を渡そうとする。Dはその手をつかむ。

D …惚れた。

皆 え？

暗転。ゆっくりと溶明。雨のSE。登場人物は以下のように並んでいる。Eがお茶を点ている。そこにしなだれかかるように、Dがくっついてうっとりしている。Fは手紙を一枚一枚透視しており、その作業をBとCが手伝っている。Gは壁、もしくは床にてるてる坊主を並べている。BCFGの席の近くに茶碗が置いてある。Aは、雨漏りがしている天井を見上げて、Eに相談し、部屋の隅にあったバケツを水の落ちてくるところに置く。その後しばらく水がバケツに落ちるSE。Aはそれをやや見ながら、（※皆を振り返って、『多治見工業のネタはギャグが思いつかなかったの？』と言い、皆が一斉に『シッ』と言う、とか）席に着いてお茶を飲み、「苦っ」という顔をする。

F これも入ってますね。あ、これも。もう、ほとんど入ってますね。

C コレモ日本ノ習慣デスカ？

B これが習慣だったら、かなり怖いけど。

F 萌子先輩、現在86通中、84通に入ってますね、カミソリ。

E その2通に救われる思いだよ。

F こっちは、わらん人形入ってます。

E …はいはい。

A 「アイドルをめぐるドロドロの嫉妬劇」。高校生の恋愛って激しい。

F これを普通だと思うなよ。

- B まあでも、全校生徒憧れの佐藤さんを射止めたんだから、このくらいのはね。
- E 射止めたって言わないし。佐藤さん、さつきから重いんだけど。
- D しあわせ…。
- E こんな雨漏りする部屋でうつとりされても…。
- F でも萌子先輩、能力捨てたいのに、まだお茶立ててるんすね。
- E 捨てたい能力でも自分の一部には変わらないからね。きちんと向き合わないと。はい、佐藤さんどうぞ。
- D ふふっ。萌子のその男らしい感じが好き。
- E だから、男じゃないし。
- D あっちの四又男より百倍素敵。
- G 四又じゃないって、もう分かったろうが。勝手に惚れて勝手に嫌うな。
- A 博士が一番かわいそう。「美女に翻弄された草食系の悲劇」
- G 子どもにかわいそうとか言われたくない。やっぱり能力者に関わるとろくなことがないな。
- C ジヤ、研究ヤメマスカ？
- G 意地でもやめない。
- B じゃ、そのてるてる坊主は？
- G 科学的に説明する時までの、心の安定剤だよ。
- C 科学デハ 解明デキナイト思イマスガ。セイゼイ研究ニ ハゲテクダサイ。
- G 「はげんで」。ほらほら、ふっさふさのロン毛だから。
- B 意気がびったり合ってきたなー。
- E 美友と小西は、どうすんの？ IEAに入れてもらうの？
- F んー。まあ、もう少しここで今まで通りやってみよっかなって。
- B 萌子先輩と一緒にいられるうちは。
- E ……そっか。ねえ、せつかく点てたんだから、みんな飲んでよ。
- それぞれ、やっていることを中断して、席についてお茶を飲む。ゆったりした雰囲気。

C ア。

F ……え？ 予感？

C ……明日ハ、晴レマス。

ME。皆、茶碗を持ったまま、にっこりして空を見上げる。幕。

参考・引用

会社名 「株式会社 恵那川上屋」「バロー」「吉野家」 マーク「ナイキ」

演劇 S. E. T. 上演作品（1980年代）中のネタ

歌 「トイレの神様」 作詞 植村花菜・山田ひろし 作曲 植村花菜

平成23年度岐阜県高校演劇東濃地区大会上演作品

恵那高校 「8月サンタ」植松七海作 多治見工業高校 「アンコール」伊藤貴晴作

土岐紅陵高校 「アニキーズ・ピザ」演劇部作 多治見高校 「忘れ物」岩崎航作

中津高校「公園の神様」 日下部光穂作 中津商業高校「ただいま！の向こう側」 若森明作

※これらの上演作品からの引用は、合同公演の観客を意識したものであり、他の上演には適しません。もし
本脚本を利用される場合は、これらの箇所はカットしてください。